

と申ても、更に人間とは見え不申候、右故に店々も相仕廻、蔀など指堅め居候、戸口開置候へば、非人共無體に押入、食餌をあたへ不申内は、更らに立退不申候故、無據白晝の門戸を閉、用事御座候者、戸口より用事を足し、志等有之、施行杯仕候節は、家内中立わたり世話仕候得共、我勝に前後を争ひ泣さけび、老弱の者の貰候食物を奪ひ取、なきさけび候聲、身にしみ胸に答へ申候、互に食を奪ひ合、溝へ落入半死半生之者數多、叫喚大叫喚、八寒紅蓮のくるしみ、食を奪合打合つかみ合、互に疵を得候體、修羅道の有様、目前に御座候、火事は一夜に二ヶ處三ヶ處より出來、焼死する者數多、焦熱大焦熱の炎に入、烟にむせび、牛馬鷄犬之焼亡夥敷御座候、世尊滅後三千八百年、彌勒の出世迄は、餘程間も有之様に承り候處、今その期來候哉と心細く、少も安心無御座候、依之御上様にも、何卒飢渴之者御救ひ被遊度思召候へ共、近年打續候不熟損毛に付、御貯も悉く盡候故、不被爲任思召御心遣、被爲痛候へ共、更に其甲斐なく、殘念に被思召、乞食非人へ御施行被遊候ても、大海の一滴、中々届不申氣之毒千萬に奉存候。○申略

古來稀成義は、非人共犬猫牛馬を喰候は、世に不思議に存候所、死掛り候人之肉を切はなし、格別うまき味なるよし申候、言語同斷、かゝる時節にあひ申候事、いかなる事に御座候哉奉存候、乍然ケ様之様不存候は、生涯佛も御經もうはの空にて、至敬の信心も有之間敷奉存候處、六道四生之有様、凡俗の身にて、目前に見申候事こそ、難有奉存候、乍去知らぬが佛、見ぬが花とも申候、何卒無難に明年を迎へ、豊作を祈申候外、他事無御座候、抱體當地之事、中々難盡筆紙實に九牛の一毛に御座候、猶追便萬々可申上候、恐惶謹言、

卯十一月十一日

井筒屋 三郎兵衛様 平兵衛様 傳兵衛様

恵比須屋 善六

〔農喻〕第三 餓死人の事

卯

三年

天明

のき

んも

此近國關東のうち

はいまだ大き

んとはいふ